

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数五十五枚)の記載あり〕

目録

文久二年八月廿一日生麥ニ於テ従士英人殺害ノ事実附十

一節市來四郎談話速記

文久三年癸亥七月鹿兒島灣ニ於テ英船ト戦争ノ事実附十

七節全上

前ノ濱戦争後藩庁ノ措置ニ関スル事実附九節全上

以上三条

五七六 文久二年八月廿一日生麥ニ於テ従士英人

殺害ノ事実附十一節

市來四郎談話速記

吉木竹次郎 速記

明治二十五年十二月十二日午後一時着席、市來四郎

君臨席

市來君(四郎)

(神奈川県)

生麥村ニ於テ英人ヲ斬殺シタルコトハ、

私ニハ其場ニ居タルニアリマセン、後日其時供方中ニ

在テ、親シク見聞シタル人々ヨリ承リ、或ハ編輯ニ就

テ、久光ニ親シク承リタル次第ヲ御話致シマス、御承

知ノ通り這ノ事ハ誠ニ面倒ナ話デ、鹿兒島デモ十人ガ

十人、其時ノ景況、或ハ翌年七月戦争ニナルマデノコ

トハ、皆ナ少シツ、話ガ違ヒマス、夫故筆ヲ取ルニ困

リマシタカラ、久光ニ委シクソノ次第ヲ聞キマシテ筆

記致シマシタ、先ツ其大略ヲ摘ミテ御話致シマス、御

承知ノ通り文久二年ノ春、久光ガ初テ上京致サレマシ

テ、寺田屋ノ変モゴザリマスシ、夫レカラ大原卿ハ、

(重徳)

特別ニ関東ニ 勅使ニテ御下リニナリマシテ、久光モ

差添ト云フ名義デ、下向ヲ命セラレマシテ下リマシタ

デゴザリマス、大原卿ガ御下リノ前カラ続ヒテ御話申サネバ、面倒ナコトデゴザリマスカラ、其大略ヲ摘ンデ御話致シマス、御承知ノ通り、閣老久世大和守ヲ御呼ニナリマシテ御受致シナガラ、上京遅々致シマスカラ、久光ハドウモサフイフ遅々シタコトデハ済マヌト云フコトヨリシテ、朝廷ニ建言致シマシタ、朝廷モ勅使ヲ御立テノコトニナリマシタ、サフイフ運ニナリマシテ、大原重徳卿ガ勅使ニ特撰、下向サレルコトニナリマシタ、久光ハ大原卿ト同日ニ京都ヲ出發致シマシタ、其時供方人員ハ、彼是五百人許リデゴザリマシタ、当時久光ガ評判ヲ受クルトコロハ、覇業ヲ為サムトスルノ説ガ余程紛々タルコトデゴザリマシタ、夫レハ尤モ幕府ノ方ニハ早く分リマシテ、一方ナラヌ心配ニナツタサウデゴザリマス、其時ノ事情ハ、春嶽公ヨリ詳カニ伺ツタコトモゴザリマスカ、夫レハ長フゴザリマスカラ、後日ノ御話ニ致シマス、サウシテ関東ニ下リテ、幕府ガ勅命ヲ循奉スルコトニナリマシタハ御承知通ノコトデ、内輪ノ事情ハ長イ話デ、是レモ一段ノ話ニナルデアリマス、春嶽公杯ノ御尽力ニ依リテ、三ヶ条ノ勅命モ奉セラル、コトニナツテ、首

尾能ク朝意ノ行ハレタト、一ト先ツ安心シテ、八月二十一日高輪ノ藩邸ハ出發致シマシテ、帰京デナク久光ノトコロハ帰国ト云フモノデゴザリマシテ、直クニ帰国スル積デ出立致シマシタ、復命ハ大原卿ノ御責任デゴザリマスカラ、久光ハ直ニ帰国ノ積デゴザリマシタ、当時久光ハ種々ナ風説ヲ受ケテ、全ク覇権ヲ握フトノ策略カラ、此ニ至ツタト言囃サレマシタノミナラズ、久光ガ初度上京致シタ建言ニ、無謀ノ攘夷ハ宜シクゴザリマセヌト云フ主義デゴザリマシタ、ケレドモ久光ノ心中ト云フモノハ、故齊彬ハ開港論者デゴザリマスカラ、ドコマデモ其意ヲ継紹致シマシテ、無謀ノ攘夷ハ宜シクナイ、後々ハ兎角開港セネハナラヌト云フ腹デゴザリマシタケレドモ、時勢奈何セン、攘夷説流行ノ時デゴザリマスカラ、開港ト云フ説ナド云出シテハ、人心ヲ損ヒマス、或ハ国中モ攘夷家ガ沢山居リマスカラ、彼此レ其辺ヲ斟酌致シ、中ニモ朝廷ニ建言致スニ就テハ、大勢奈何トモナシカタク、無謀攘夷ハ不可ナリト云フ文字ヲ以テ、建言致シタサウデゴザリマス、其含ムトコロハ到底開港論デ、時勢ヲ俟ツテ開港ト云フコトヲ申ス積リテアツタソウデス、各藩共攘夷論ノ

大勢デアルカラ、攘夷不可ナリトモ言ハレヌ、言葉ニモ出サレヌ程ノコトデアツタト申シマシタ、此話ガ生麥ノ挙動、心ナラヌコトデアツタト申ス序言デゴザリマス、久光ノ話サレマスコトニ、高輪邸ヲ出立致シテ、大原卿モ同日ニ御立チニナリマシタ、久光ハ生麥テ、昼休ミヲ致ス積リデゴザリマシタサウデス、生麥ノ立場近ク行列ヲ立テ、ヤツテ行ク処ニ、供頭ノ奈良原喜左衛門ト云フ者ガ、駕籠側ニ居リマシタガ、異人カト云フ一ト声掛ケテ、先供ノ方ニ駈ケ出シテ行タカラ、定メテ外国人ガヤツテ来ルカラ、行列ヲ縮メルカドウカデアラウト、何心ナク聞イテ居タ、然ルニ程ナク駕籠ノ行クヲ止メタ、偕テハ外国人ガ行列ニ踏込ミテ来タカト思ツタ、サウスルト、駕籠側供方ノ者ガ前後左右ニ集ツタ様子デ、如何様失礼デモ致シタカト考ヘテ、左右ノ者ニ何事乎ト尋ネタレトモ一向分ラヌ、異国人ガ參ルサウデゴザリマスと云ツタ、夫レデ行列ニ障ツタカ知ラス、喧嘩ヲセネハ宜イガ、小事ヲ以テ大事ヲ過ル様デハイケナイト心配ヲ致シタ、サウシテ駕籠ヲ止メテ居ル間ガ余程ノ間デアルカラ、何事カ聞テ来イト、供方ノ者ニ云ツタケレトモ、駕籠側ノ者ハ

ドウモ訳ガ分ラヌ、畏リマシタノト云フ位デ、兎角何事カ仕出シタト思フテ居タ、暫クスルト又駕籠ヲ担キ行クコトニナツタ、其時駕籠ヨリ頭ヲ出シテ行列先キヲ見ルト、何カ騒イテ居ル様デアル、何デモ喧嘩ヲ致シタト、駕籠側ノ供頭ニ問フタトコロガ、異国人ヲ斬リマシタサウデスト云ツタ、夫レギリデズンズンヤツテ行クカラ、駕籠ノ中カラ路傍ニ氣ヲ付ケタトコロガ、死骸ハ見ヘヌ、唯路傍ニ血ヲ流シテ居ルマデ、アツタ、死骸ハナイカラ定メテ傷ケラレテ、ドコヘカ行ツタデアラフト思ツテ、程ナク生麥ノ立場ニ着テ、茶一盃飲ンデ居ルトコロニ、側役ノ谷川次郎兵衛ト云フ者ガ出テ来テ、誠ニ大変ナ事ヲ致シマシタ、異国人ガ御行列ニ障リマシタカラ、斬リ棄マシタト、スフイフコトヲ届ケ出デタ、偕テモ困ツタ事ヲ致シタト、小事ヲ以テ大事ヲ惹キ出シタト心配ヲ起シタ、サウイフコトデ小事ヲ以テ一兩人殺シテ、何ニモナラヌコトデアル、天下ノ大変ヲ惹キ出シ、困難モ惹キ出シタト思ツタケレトモ、ソコデサウイフ事ヲ言ヘハ、人心ニモ関スルカラ黙シテ答ヘナカツタ、暫クスルト中山忠左衛門（実善薩州藩士）出テ来テ、誠ニ愉快ナコトヲ致シマシタト云ツタ、

何ノ愉快ヲシタト問フタトコロガ、異国人ガ御行列ニ踏込ミマシタカラ、奈良原喜左衛門等三四名ノ者ガ斬棄テマシタト云タカラ、拙者ニハ返事モシナカッタ、夫レカラ大久保ガ出テ言フニハ、如何取計ヒヲ致シマシヨウカト云ツタ、如何取計ヲウト云フコトガ此場ニナリテアルモノカ、其方等評議シヨト言ツタ、拙者モ考ヘガ付カナカツタカラサウ言ツタ、夫レ丈ケ言ヒ放ツタ、大久保云フニハ、御供頭ノ者一人江戸ニ御差返ヘシナサレ、御家老・御留守居等ニ取計ヒ御申付云々ト申出シタカラ、兎角サウナクテハナルマイト言ツタ、夫レカラ家老方筆者ヲ一人差添ヘ遣ハサウト云フコトデ、其通りデ宜シカラウ、又横濱ノ方ニ一兩人探偵ニ出サウト言ツタ、高崎猪太郎(今ノ五六デゴザリマス)横濱ニ遣シタ、程ナク生麥ヲ出立シ、サウシテ程ケ谷泊リノ積リデアツタガ、道中デ言フニハ、ドウモ横濱近クデハ彼此レ面倒デゴザリマスカラ、戸塚^{同上}マデ踏越シヲ願フト云フコトデアルカラ、如何ニモサウデアラフ、近イトコロデハ面倒デアルカラ、其通りデ宜シイ、是レ丈ケ拙者ニハ言ツタ、サウシテ戸塚ニ一泊スル様ナ次第デ、夫レギリデ一向訳ガ分ラヌデアツタ、夫レカ

ラ其日ノ暮時分ニ、高崎ヨリノ報知ニ横濱ハ大騒動デアル、外国人ガ馬デ乗り出スモアリ、或ハ公使館ニ馳セ付ケル者モアリ、大騒動或ハ追躡ノ説モアリ、其準備ヲセヨト云フコトデアツタカラ、準備ト云ツテモトウスルカト云フト、兎角防衛ヲ為スヨリ外ナイ、外国人ハ多人數出掛ケムトセシヲ、幕役カ百方説諭シテ途中デ停タリト、其報知ヲ聞イテ、供方ノ者ハ鉄砲トカ火繩ニ火ヲ付ケルトカ、槍・薙刀ノ鞘ヲ脱ストカ、夜モスカラヤツテ居タ様子、外国人ガ襲フテ来ルト云フ氣デ居タサウダケレドモ、何タルコトモナクシテ、翌朝ハ戸塚駅ヲ立ツテ、順々東海道ニ向ツタ次第デアル、サウスルト名古屋ニ着タ夜、江戸ヨリノ報知ガアツタ、幕府ノ届ケ向キハ、予ネテ内用頼入レニナツテ居ル、幕府ノ御右筆トカ、御先手トカ向々ノ役人ニ相談致シタトコロガ、幕府モ狼狽シテ評議区々デ、兎角仕方ガナイカラ、先ツ殺シタ者ハ亡命シタト云フトコロニ届ケサセルガ宜カラフト云フ内示ニナツテ、夫レカラ留^西守居ノ名ヲ以テ、其下手人ノ姓名ハ足輕岡野新助ト云フ者ニテ、拵^{マツ}ヘ名アルデ、此者ハ前年江戸邸ニ居テ、故アツテ亡命致シタ、其者カ此節久光ノ帰国ヲ途中ニ

拜マムト、生麥ノ街上ニ出テ居タ所ガ、外国人ガ馬上
デ乗切リテ、行列ニ乗込ンデ来ルカラ、直ニ斬リ棄テ
タト云フ届ケデゴザリマス、サウシテ、此岡野新助ハ、
踪跡ガ分ラヌト云フ届ニナツテ居リマス、夫レハ幕府
ノ御右筆及ヒ御先手、其他用頼ミノ方々ガ、内評議デ
示シニ依リテ届致シタコトテアル、サウイフ所デ京都
ニ着ク迄ハ、横濱ノ景況或ハ幕府ノ形勢ハ報知ハアレ
ドモ、別ニ達シノ趣モナカツタサウデゴザリマス、夫
レカラ久光ノ考ニハ、幕役ノ内論ニ依リテ届ケタコト
テアルカラ、夫レニ対シテ、幕府ノ処分ガアラフト考
ヘテ居ツタサウデス、然シテ久光ハ草津駅ニ参リマス
時分ニ、栗田宮久瀨宮朝
彦親王・近衛殿(忠應)、或ハ伝奏等ノ御方ヨ
リ、帰国シテハ濟マナイカラ、復命ノ為メ京都ニ出ル
様ニト云フコトヲ仰セ越サレタ様子、其時久光ガ考ニ
ハ意外ナ種々ノ評判モアリ、殊ニ 勅意ノ貫キタルハ、
全ク大原卿ノ御力ニ在ルコトデ、久光ハ御差添文デア
ルカラ、復命杯ハ恐レ入ルコト、云ツテ、御断申上ケ
タケレドモ、再三ノ御沙汰デ止ムヲ得ズ、上京ノ御請
ケヲ致シタサウデス、左モナケレバ、直クニ帰国スル
積リデゴザリマシタサウデス、夫レカラ京都ニ出マシ

タトコロガ、出格ノ御懇命ヲ蒙リマシテ、參内天拜モ
仰付ケラレ、加之御劔拜領等モ致シタル次第デゴザリ
マス、其時 朝廷デハ、久光ハ陪臣ダカラ御召出シニ
ナツテ、位階ヲ下サルト云フ御内意デゴザリマシタケ
レドモ、固ク御辞退申上ゲ、早々ニ京都ヲ御暇致シマ
シテゴザリマス、其間ニ 朝廷ヨリノ御内意ニハ、攘
夷ノ策略及ヒ将来政務ノ方針御下問、或ハ生麥ニ於テ
英人ヲ斬棄テタコトノ御賞誉ガゴザリマシタ、成程有
難イ事デゴザリマスケレドモ、久光ニ於テハ夫ヨリ一
層心配力重クナツテ、小事ヲ以テ大事ヲ惹キ起シ、其上
朝廷ニハ、外国人ヲ殺シタヲ御賞誉下サレテカラハ、
直クニ攘夷ノ世ニナツタ、是レカラハ攘夷ヲセネバナ
ラヌト、前後無量ノ心配ヲ惹起シタサウデス、併シナ
ガラ早致シ方モナイ、殊ニ 朝廷ヨリハ御内々ナカラ
モ御褒賞モ下サレ、此後時機ニ依リテハ、攘夷セネバ
ナラヌ場合トナリタリトハイヘ、無暗ナ事ヲ為シテハ
ナラヌ、又 朝廷ヨリハ御褒賞モ下サレタルニ依リ、
國中ノ攘夷家ハ皆勢ヲ得テ騒モアリテ、内外心ナラヌ
ト云フハ此事デアルガ、然レドモ此後一旦ハ、戦ハネ
バナラヌト決心ヲシタソウデアリマス、夫レデ久光ノ

考へハ、先代ノ遺意ニ(御先代ト云フハ齊彬デアリマス)皇威ヲ海外ニ輝ク様ニセネバナラヌ、支那ノ覆轍ヲ考へ、宇内ニ交際ヲ厚クシテ、国威ヲ輝サネバナラヌトノ御趣意ナリシ故、一二ノ外国人ヲ斬ル様ナコトデ、国威ヲ輝カスコトノ出来ルモノデナイト、其辺ハ胸ニ畳ンデ居ツタケレドモ、時勢ノ然ラシムルトコロ、実ニ仕方ノナイト云フハ此事デアリシト、夫レカラ外国人ト幕府トノ押問答ガアツテ、江戸ノ報知ハ日々程モアリ、或ハ其顛末ヲ正サル、次第モアリ、朝廷ヨリハ夫レヲ御賞与下サレ、或ハ各藩ヨリハ内々潔キ事ヲヤリタリト、祝儀ヲ貰フ様ナコトデ、甚ダ心ナラヌト云フハ此事デアル、併シナカラ、致シ方ナイ事デアルカラ、最早決心ト云フハ此時デ、最モ生麥デモ稍決心シタ、ソコデ大久保杯ハ兎ニ角攘夷ハセネバ王政ニ返スコトハ出来ヌ、或ハ先代ノ志ハ継クコトハ出来ヌトモ言ツタ、然ルニ大久保・中山ナドハ、一向ヲ攘夷セネバナラヌト云フコトデ、以前ハ無謀ナ事ハセヌ、皇威ヲ輝カスニハ、万国ニ交際セネバナラヌトイフコトデアツタガ、皆ガ攘夷々々ト変シタ、困ツタハ此事デアル、幕府デモ余程驚イタモノト見ヘテ、供頭即チ

生麥ヨリ返シタ者ヲ町奉行所ニ留メ置テ、其顛末ヲ調ヘル様ナコトニナツテ、幕府モ表ト内ニツ調ヘガ表裏シタモノデ、裏面ヨリハ、是レハ日本ノ大事デアル、徳川家ノ不都合ニナルコトデアルカラ、無法ニ殺シタヲ謝レト云ツテ、内論モアツタサウデ、ケレトモ其理由ガアレバ、格別江戸在勤ノ国老ヨリハ決断致シテ、色々喧ク言ツタ後ノ事デ、如何トモスル事カ出来ヌ、夫レカラ戦争ノ準備モセネバナラヌト云フ覚悟ヲ致シタサウデス、英艦ト鹿兒島海ニ戦ヲ開イタ原因ト云フハ、夫レ丈ケノコトデゴザリマス、其間枝葉話ハ沢山ゴザリマスガ、大道筋ハ是丈ケデゴザリマス、久光ガ下知致シタコトデハ素ヨリゴザリマセン、中ニハ下知致シタ様ニ云フタモノモゴザリマスケレドモ、決シテサウデゴザリマセン、表面ノ形チニ依リテ言フタモノデ、久光ノ心中ハ時機ヲ察シテ、齊彬カ趣旨通開國論ヲ発スル胸算デアリタリト申シマシタ、実ニ行カ、リノ小事ヨリ、卒然ニ起ツタ事デゴザリマス、竹中君(兼和)御先供ノ間ヲ乗り切ツタノデゴザリマスカ、市來君 先供方ニ居ツタ者、今現存致シテ居リマシガ、

其者ニ聞ケバ、向フカラ乗込ミテ来タモノデナイ、生
麥ハ街道モ狭イ所デアルカラ、外国人モ猶予シテ、道
脇（通）ヲ通ラフトシタソウデス、然ルニ攘夷主張ノ輩、即
チ奈良原ナドガ無暗ニ切り付ケタソウデス、加之一名
ハズタズタニヤツタソウデス、

岡谷君（新吾 館林藩主） 奈良原繁君デゴザリマスカ、

市來君 否、繁ノ兄デゴザリマス、今ノ繁ハ先供方デゴ
ザリマス、兄ナルモノガ切り付ケタカラ、助太刀シタ
位ナコトニ聞イテ居リマス、外ニ三四名モ棄ミ半分ニ
切シタト云フコトデゴザリマス、サウ云フコトデ誰
レガ斬ルトモ知レズ、ズタズタニヤツタソウデス、

寺師君（宗徳） 壮士ノ者ハ我モ〜ト争ヒシ様子デ、又
止メタ者モアツタト聞キマス、或人ノ話ニ、黒田清隆
モ止メタ一人デ、刀ヲ抜き掛ケシ者ヲ馬鹿ヲスルナト
云ツテ、鎧ヲ引イタ様子、其時壮士輩ハ、ヤラネバ恥
辱ト云フ様ナ心持デアツタト見ヘマス、

岡谷君 総御供方ハ幾人アリマシタカ、

市來君 供方ハ後ト先キマデ五百人モ居リマスケレド
モ、夫レハ卒僕モ居リマスル、始メ京都ニ參ル時ハ千
余人デゴザリマス、夫レヲ京都警衛ニ殘シテ、行列ハ

大抵デゴザリマシタソウデス、又後ト先キニモ警衛シ
タソウデス、

岡谷君 大原卿ハ同日ニ御立チデアリマシタカ、

市來君 サウデス、大原サンハ生麥ノ変後、幕府ヨリ早
打ヲ以テ、道ヲ中仙道ニ御變ヘト云フコトヲ申上ゲタ
サウデス、ケレドモ道ハ御變ヘニナラヌ、世上ニハ中
仙道ニ御變ヘト云ツテ居ルガ、間違デゴザリマス、
寺師君 全ク失礼モ何モ致サヌノデ、唯々攘夷説ト云フ
説ニ犯カサレテ、伐リ付ケタコト、聞ヘマス、

岡谷君 横濱カラ一小隊ヲ以テ出タトコロガ、幕吏ガ差
止メタ様ニ聞キマスルカ、

市來君 サウデゴザリマシヤウ、夫レヲ差止メナケレバ
大事ニ及ンデ居ルノデ、高崎ノ話ヲ聞クト凄イ有様デ
アツテ、騎馬デ出ル者モアリ、如何ナルコトニナルヤ
ト思ツテ、実ニ凄ヒ形勢デアツタソウデス、

寺師君 内情ヲ聞キマス、英人ガ兵ヲ以テ後トヲ追フ

積リデアツタ様子、夫レガ幕吏ノ止ムルトコロトナリ、

夫レカラ佛國公使ハ軍艦デ海岸ヲ巡リ、東海道ニ先廻
（Chargé de Affaires）
リシテ、上陸シテ撃ツト云フ軍議モアツタ様子、英國
（Chargé de Affaires）
公使カ言フニハ、曲ハ彼レニ在リ、直ハ我ニ在ルカラ、

サウイフコトヲ為スニ及バヌト言ツテ止メタ、日本政府ガ責任ヲ帯ビルカラ、其談判ノツカヌ時ニ、兵ヲ以テスルガ宜シカラウト云ツテ止シタト聞キマス、一旦ハ陸兵ヲ以テ撃チ及バネバ、軍艦ヲ以テ撃ツコトニ決シタ様子、然ルニ英公使ノ意見デ止マツタト云フコトデス、

市來君 久光ガ申サレマシタニ、軍ハ心ナラヌト云フテモ、人ガ承知セヌガサウイフ訳デナイ、拙者ガ御先代ノ意ヲ継ギシ開國論ヲ初メル積リデアツタケレドモ、亜米利加ト約定ノ様ナコトデハイケナイカラ、先ツ内政ヲ整へ、人心ヲ一ニシ、武備ヲ嚴ニシ、然シテ後ノコトデナケレバナラヌトイフ考ヘハ、固ヨリ有ツタケレドモ、世ノ風潮ハ攘夷説ガ盛ンデアル処カラ、清東御艦小松・大久保等ガ言ニモ、兎角攘夷ヲセバナラヌ、人氣モ纏マラナイトイフコトヲ毎度言ツタ、其中ニ小松ハ、開港モセネバナラヌト云フコトガ腹ニアツタケレドモ、大久保杯ハ各藩浪士杯ノ情実ヲ酌ミテ、鎖港ヲ以テ目のトシテ居ツタ様デ、故ニ拙者モ攘夷ハ不可ナリト云ツタコトハナク、無謀ノ攘夷ハ宜シクナイト云フコトヲ建言シタ、是レハ一大事ノ文字デアアル、夫レヲ今ニ

シテモ聞誤ラレテハ、当時ノ本旨ニモ違フ大事デアル故、無謀ノ攘夷ハ宜クナイト云フコトヲ言ツタト云フコトデアリマシタ、

岡谷君 生麥ノ事ノ前デゴザリマスカ、外国人ガ途中デ無礼ヲシタトキノコトヲ、御届ケナサツタコトゴザリマスガ、其事情ハ、……

市來君 久光在江戸ノ時、今ノ供方ノ者即チ奈良原等ノ輩ガ毎々議スルニ、途中デ外国人ニ対シタル心得振ヲ協議致シマシタ様子デ、其時途中デ外国人ガ無礼ヲシタ時ハドウスル、斯様ニシタ時ハドウスルト云フコトヲ、毎度問題ト致シテ討議シマシテ、後幕府ニ届ケルガ宜イ、皇族或ハ大名ガ通ル時ハ、御取締アラマホシト申立タルニ、幕府ハ其辺ノ取締ヲ付ケルト云フコトヲ申達ガゴザリマス、故ニ生麥ノ変後、藩論ハ幕役ノ取締不行届ニアリテ、曲ハ彼レニ在リ、幕府ノ手落ちデアルトイフコトデゴザリマシタ、

岡谷君 幕府ノ質問ハ、ドウイフ処ヨリデゴザリマシタカ、

市來君 幕府ハ実ニ困難ナコトデ、閣老方ニモ別シテ御心配ナサレタソウデス、所謂板挟ミトモイフベキデア

ツタト承リマシタ、就イテ謝リヲ言ツタガ宜カラウ、
相手ノ下人ヲ出スガ宜カラウ、然ラバ償ヒヲ出セト
云フカラ、其時ハ幕府デ御取計ヒガアルカラ、謝リ文
ケヲ申立ヨト云ツタモノデアアル、然レドモ藩論ハ、曲
ハ幕府ニアリト意地ニナリテ謝マラヌデアリマス、其
押合問答ニ日ヲ耗シ、其中ニハツマラヌ過激ナ書面ナ
ドモ出シマシタ、如此ノ意地ニナリテ、遂ニ文久三年
ノ春ハ久光上京シテ、僅三日ノ滞京デ攘夷ノ為メニ下
ルト申シテ、届ケ放ニテ帰国致シマシタ、夫レハ知恩
院ニ三日居ツタ時ノコトデ、夫レガ幕府トノ争ヒカラ
意地ニ出タモノデアアル、其時外国ニ遣ル軍艦ガ有ルデ
モナシ、然ルニ外国征討云々ノ可笑ナ書面ヲ出シタ、
アノ書面ハ久光ノ存セヌモノデ、実ハ留守居共ヨリ差
出シタモノデアリマスガ、斯ク摺違ヒシモ固トク幕
府トノ悪感カラデゴザリマス、

岡谷君 京都ノ留守居ニハ、ドコマデノ権限ヲ御任セカ
知ラヌガ、ヒドイモノヲ出シタモノデゴザリマスネー、
寺師君 アノ時ハ、藩主ノ命ヲ待ツハ間ニ合ハヌ場合デ
アリマシタ、

市來君 私ハ齊彬ニ使ハレマシタハ、西洋流ノ砲術トカ、

大砲製造トカ云フ様ナコトニ使ハレマシタカラ、開港
論ノ方デアツタケレドモ、開港ト云ヘバナグルル、ト
カ、殺サル、トカ云フ様ナ世ノ形勢デゴザリマシタカ
ラ、表テニハ攘夷ハセネバナラヌト云ツテ居リマシタ、
実ニ大勢ト云ハ、致シ方ナイモノデゴザリマス、

寺師君 齊彬ノ徳望ナラバ、藩中一人モ非ノ字ハ言ハヌ、
如何ニ有志ト雖モドウモ反対ハ出来マセヌ、故ニ藩主
ノ意見ノ通りニ行ツタデアラフ、齊彬ハ人ヲ御スルコ
トガ手足ヲ使フ如クデ、齊彬ノ時ハ鹿兒島ハ冥々ノ中
デハ開港デアアル、アノ人が生キテ居レバ、攘夷トイフ
コトハ口ニ出サセズシテ済ムノデアアラウト考ヘマス、
岡谷君 大勢ノ推ストコロハ防グベカラザルモノデ、一
国ニシテサウデアアルカラ、世界中サウイフモノト見ヘ
マスネー、

寺師君 前年、伊藤伯（權丞）ニ久光ノ事歴ヲ聞キニ行ツタコト
ガアリマスガ、其時伊藤伯ノ話ニ、先ヅ申シテ見レバ
慶應ノ始メマデト云フモノハ、島津家ニ於テハ藩主公
ノ御意思ト云フモノガ筋ヲ為シテ居ル、慶應ノ年間ニ
ナリテヨリ以來ハ、即チ有志所謂壯士ノ意見ガ多く、
従ツテ藩主公ノ御意思ハ届カナカツタ、トコロガ長州

ハ始メカラ壯士ノ意思デアツテ、藩主ノ意思ハ多ク届
カナカツタト云フコトデアル、故ニ時々ニ過チヲ致シ
タモノデアルト言ハレタコトガアリマシタガ、成程大
勢ノ趣(趣)ク処ハ、善悪共ニ致方ハナイモノト思ハレマス、

市來君 今日ハ時限モ迫リマシタカラ、是限リニ致シマ
シヤウ、今日ノ御話ハ島津家ニ於テハ重大ノ事柄デ、
確正ナル事實ヲ後世ニ伝ヘネバナリマセヌガ、前ニ御
話申シタ通り、十人が十人少シツ、話シガ違ヒマスカ
ラ、大体ノ事實ハ久光ニ承リマシタ大要デゴザリマス、
後日尚ホ此事ヨリ起リタル事柄モゴザリマスカラ、御
話申上ゲマシヤウ、或ハ戦争ニナルマデノ事實ハ、舊
邦秘録ト申ス書ニ詳ニ記シテゴザリマス、後日御覽ニ
入レマシヤウ、実ニ今日ノ御話ハ概略ノ御話デゴザリ
マスカラ、諸君其御心得ヲ願ヒマス(一同立礼)
(史談会通記録第十輯所載)

五七七 文久三年癸亥七月鹿兒島灣ニ於テ英船ト

戦争ノ事實附十七節

市來四郎談話

吉木竹次郎 速記

明治二十五年十二月二日一同着席、市來四郎君臨席、

市來君(四郎) 久シイコトデアリマスカラ忘レマシタケ

レドモ、思出シテ不束ナガラ御話シ申マス、鹿兒島デ
英船ト戦争ヲ致シマシタハ、文久三年七月二日・三日
ノ両日デゴザリマス、此ノ原因カラ御話致シマス、ト

文久二年ノ夏、久光が大原卿ノ関東御下向ノ時ハ、御
付添ヲ命セラレ、江戸ニ参リマシテ、其秋八月帰国ノ
途中デ、八月二十一日デゴザリマス、生麥村ニ於テ英
人ヲ殺シタコトガ原因デゴザリマス、夫レカラ鹿兒島
戦争トナツテ居リマス、其殺シテカラ戦争マデノ間ノ
種々ノ事實ヲ御話シ申シマスハ、中々長イ話ニナリマ
シテ、一日ヤ二日ニ御話申シテモ尽クサレヌ次第デゴ
ザリマス、今日ハ、鹿兒島ニ英船カ侵入致シテ戦争ニ
ナツテ、其後和睦ヲ致シタコトヲ御話致シマス、

鹿兒島ニ英船ガ大小七隻参リマシタハ、文久三年ノ六
月二十七日ノ申ノ刻時分ニテ、鹿兒島ヨリ二里半バカ
リアル所ノ谷山郷(鹿兒島市)ト申ス所ニ、七ツ島ト云フガゴザリ
マス、小サイ島ガ七ツアリマスカラ、七ツ島ト申シマ
ス、其冲合ニ乗込ミテ碇泊致シマシタ其軍艦ハ、大軍艦
ガ一隻、中形軍艦ガ二隻、四艘ハ小サイノデ今言フ巡洋
艦トカ、砲艦トカ申ス様ノ船カト思ヒマス、皆ナ小サ

イデゴザリマシタ、固ヨリ本藩デハ戦争ヲ致ス積リニ
ナツテ居リマシタカラ、前以テヨリ海岸ニハ随分警備
モ堅固ニ設ケ、大小砲ヤ或ハ烽火台ナドモ拵ヘマシタ、
可ナリノ準備ガ出来テ居リマシタ、ソコデ英艦ガ見ヘ
タト云フコトヲ、遠方カラ烽火ヲ擧ゲマシテ城下マデ
通知致シテカラ、予テ準備ノ通り、砲合ヤ其他ノ警備ノ
兵隊ハ、烽火或ハ号砲ニ依ツテ悉ク持場々々ニ出マシ
テゴザリマス、ソコデ英艦ハ七ツ島ノ沖合ニ七隻ナガ
ラ碇泊致シテ、依然トシテ何タルコトモナクテ、其日
ハ碇泊致シテ居ツタデゴザリマス、夫レカラ役人共ガ
出テ、何様ナ事デヤツテ来タカト云フコトヲ尋ネマシ
タ処ガ、彼申スニ、生麥ニ於テ我國人ヲ殺シタコトニ就
テ、幕府ニ掛合ヲ致スケレドモ、曖昧模糊ノ答ヘデ、
一向訳ガ分カラヌカラ、止ムヲ得ス談判ニ来タノデア
ルト申シテ、其参ツタ当日ハ最早ヤ夕景ニナリマシテ、
其俣ニ置イテ、砲台ノ警備兵杯ガ出テ警護シテ居ツタ
デゴザリマス、翌日即チ二十八日ノ朝、巳ノ刻比デゴ
ザリマシタ、二里半バカリノ所デゴザリマスカラ、城下
マデ直チニ乗込ミテ、城下ノ海岸砲台ノ前十町位ノ所
ニ、其七隻ガ投錨致シタデゴザリマス、程ナク応接ノ

役人ガ出テ、次第ヲ尋ネマシタ所カ、大軍艦ノ方ニ廻
レト云フコトデ、其方ニ乗込ミマシタトコロガ、次官
ト申スモノヨリ書面ヲ出シテ、生麥ニ於テ無暗ニ我
國人ヲ殺シタコトニ就テ、幕府ニ掛合スレドモ曖昧模
ナルコトデ、一向訳ノ分ラヌ答弁デアルカラ、止ムヲ
得スコチラニ乗込ミテ来タカラ、此書面ヲ只今渡スカ
ラ、是レヨリ二十四時間ニ答弁セヨト云フ、斯フイフ初
メヨリ剛情ナ申振リデアツタサウデゴザリマス、其書
面ノ趣ト云フハ、生麥ニ於テ我國人ヲ無暗ニ殺シタハ、島
津三郎ノ從者ト云フコトハ判然致シテ居ルカラ、其ノ
下手人ヲ出セ、其ノ殺サレタ者ノ妻子養育料ヲ出セ、又
三十万弗ノ償金ヲ出セト云フ請求デアツタサウデス、
若シ下手人ヲ出スコトガ出来ネバ、島津三郎ノ首ヲ見
タイト云フコトデゴザリマシタソウデス、夫レカラ役
人共ガ其書面ヲ携ヘ帰ツテ、反訳ヲ致シマシタトコロ
ガ、果シテ其通りノ文意デ、夫レカラ役人ヲ軍艦ニ遣シ
マシテ、此答弁ハ重大ナコトデアルカラ、二十四時間
内ニ答弁スルコトハ出来ヌ、只今国主一即チ今ノ忠義
久麻州藩主 (給良郡)
デゴザリマス、霧島山ノ温泉ニ行ツテ居ルカラ、其往
復ト云フモ、一週間モ掛ラネバ答弁スル訳ニハ行カヌ

ト、斯フイフ答ヲ致シマシタ、サウスルト夫レハ以テ
ノ外ノコトデアル、霧島山ハ我々モ地図デ以テ知ツテ
居ル、一週間杯ト掛ルコトハナイト、色々ト嘘ヲ吐
キマシタモノデアルカラ、喧シク言出シタソウデス、
其時ハ今ノ重野安釋（薩州藩士）ヲ、乗組テ居ル支那人ト文章筆談
ノ為メニ連レテ参リマシタ、寺島宗則（旧名松本松吉）ハ洋学者ノ事デ
アルカラ、コレモ連レテ行ツタデゴザリマス、サウイ
フコトハドウシテモ、鹿兒島ノ方デハ当時攘夷流行ノ
砌デゴザリマスカラ、アチラノ請求ニ応シテハ濟マナ
イ、兎ニ角戦フヨリ外ハナイト云フコトニナリマシタ、
尤モ前以テヨリノ覚悟デゴザリマシテ、夫レテ準備モ
致シテアリマシタ、斯ク島津三郎ノ首ヲ出セト云フ様
ナ申立テ、ゴザリマスカラ、勝敗利鈍ヲ顧ミス、戦フ
ヨリ他ハナイト、始メヨリ決シテゴザリマス、サウイ
フ訳デゴザリマスカラ、最早ヤ此方ニハ戦端ヲ開クノ
準備ヲナシマシタ、然レドモ、先ツ一ツノ策謀ヲ設ケ
ヤウト云フコトニナツテ、夫レハ大久保一蔵（利通）・小松帯
刀（實善、側近）・中山仲左衛門等ノ議デアツタソウデス、兎角戦ハ
ネバナラヌケレドモ、七艘ノ大小軍艦ヲ装フテ参ツタ
モノデアルカラ、中々容易ナコトデナイカラ、謀ヲ以テ

彼ノ軍艦ヲ奪ヒ、船長ノ首モ取ロフト云フコトニ議決
シマシタ、夫レカラ刺客ヲ用ユルノ策ガ起ツタデアリ
マス、其計画ト云フモノハ、城下ニ客屋ガゴザリマス、
其所ハ高貴ノ方來タラレタ時、御接待申ス所デゴザリ
マス、其所ニ船長始メ呼出シテ、途中デヤツテ仕舞フ
カ、又ハ宴会ヲ開イテ、其場デヤツテ仕舞ハフト云フ
計画デアツタサウデス、夫レカラ伊地知貞馨等ガ軍艦
ニ参リマシテ、書面ノ趣キ、何分藩主ガ遠方ニ行ツテ
居ルカラ、答弁モ速カニハ出来ナイ、其中ニ此レマデ
ノ差シモツレヲ御談判ニモ及ビマシヤウカラ、或ハ長
ノ間ノ船中デ退屈デモアリマセウカラ、客屋ニ御出デ
下サレ、ト云フ請求ヲ致シタサウデス、其ノ時ノ使ハ
伊地知貞馨等デアリマス、其事ヲ申入レマシタトコロ
ガ、英艦ノ方デハ、言下ニ御馳走杯ニ呼バル、時節デ
ハナイ、我国辱ニナツテ居ルコトデアルカラ、是非曲
直ヲ糺ス為メデアルト云ツテ、上陸ヲ受合ハナカツタ
サウデス、ソコデ第一策ハ毀ハレマシタ、酒肴ノ用意
モ充分アツタ様子デ、無駄ニナツタソウデス、夫レカ
ラ第二ノ案ハ、船ニ乗込ンデ刺客ヲ用ユルコトニナリ
テ、奈良原喜左衛門（藩士）此輩ノ策デゴザリマス、最早ヤ呼

ヒ下ロシテヤツテ仕舞フコトハ出来ナイカラ、軍艦ニ乗込ンデ頭立チタル者ヲ悉ク斬ツテ仕舞ヒ、サウシテ船中ノ者モ撫デ斬リニシテ、軍艦ヲモ奪フト云フ大胆ナル計画ニナツタソウデス、其通りニヤロフト云フコトニナツテ、重モニ海江田・奈良原兄弟ガ主張策デアツタソフデス、英人ヲ殺シタハ奈良原、即チ奈良原繁ガ兄奈良原喜左衛門ガ始メ手ヲ下シタノデ、夫レカラ弟モ一緒ニ居リマシテ、手助ケ致シタソウデス、海江田信義モ其一系列ニ居ツテ、手ヲ下シタ面々デゴザリマス、サウイフ所カラシテ、刺客ノコトヲ案シ出シタモノト見ヘマス、ソコデ大久保ヤ小松杯モ異論ハナクテ、面白イ策ト云フ様ナコトデアツタ様子デゴザリマス、サウシテ久光ニ其事ヲ云ツタトコロガ、夫レハイケナイ、夫レハ血氣ノ処分ト云フモノデ、到底行ハレヌ、上陸ヲ促シテモ来ヌカラ、敵艦ノ軍艦ダカラト申サレタサウデス、ケレドモ大久保杯ハ攘夷家デ、外国人ト見レバ何事モ悪イト云フ人デアルカラ、強イテ願フタ様子デ、是レガ御免ナケレバ、彼等ハ固ヨリ身ヲ棄テ、居ルコトデアリマスカラ、過激ナ事ヲ為スニ相違ナイト云フトコロカラ、久光モサウイフ訳ナラバ勝手ニ

セヨ、兎角戦端ハ開ケルニ違ヒナイ、若シ云フコトヲ聞カネバ仕ヤウガナイト云フ様ナコトニナツテ、夫レカラ大久保杯ハ、撃劍家ノ輩ヲ九十八人、皆ナ奈良原・海江田杯ガ人撰シタサウデス、ソコデ命令ヲ下シタデアリマス、夫レニハ不服ナ者モアレトモ、命令トナツテ仕方ガナイカラ、各々決死シタデゴザリマス、其出立チハ小サイ船ニテ、当地デ言ヘバ五大力船位ナモノデアリマシタ、外人ノ好ム西瓜或ハ桃杯ヲ売ル姿ニテ出立チマシタノデ、今日ハ話ニモナラヌ可笑イ話デゴザリマス、其小サイ船ガ十六盃ニナツテ居リマス、夫レニ各々刺客ノ面々乗リ込ンテ、西瓜ヤ桃ノ類ヲ積ンデ売リニ出掛ケタガ六七人ツ、ノデゴザリマス、始メノ程ハ買ハウトシタ様子デゴザリマス、大艦ニハ奈良原兄弟其他一系列ノ者ガ、アレニハ大将カ乗ツテ居ルカラ、是レカラ先キニヤツテ仕舞ハネハナラヌト云フトコロカラ、頭立チタル輩ガ乗込ンタサウデゴザリマス、向フデモ余程殺氣ヲ含ミテ居ルヲ見テ取ツタ様子デ、甲板マデハ乗セタケレドモ、長・次官ノ居ル所ニハ通サナカツタサウデス、ソコデ乗込ミハ乗込ンダガ、水夫其他ニ対シテハ無益ナコト、奈良原杯モ考ヘタト

見ヘテ、手ヲ下スコトモ出来ヌデ、空シク引取りマシ
 タサウデス、初メノ申合セハ、船長ノ首ヲ取ラハ相凶
 ヲスルカラ、其時各艦一緒ニヤレ、或ハ又タ小ナ船ニ
 大砲一門宛載セ付ケテ、自由ニ砲撃ノ出来ル様ニ設ケ
 アリ、此ノ舟カ十余隻アリテ、夫レモ直チニ砲発スル
 様ニ申合セテアリマシタケレドモ、大軍艦デモ撃チ沈
 メル様ナコトハ、万々出来ナイノデス、今日ヨリ見レ
 バ兎戯ニ等シイ話デアアル、サウイフ仕掛ケデアリマシ
 タガ、何分甲板マデ乗込ミテモ、事ヲ挙ケル都合カナ
 カツタカラ、空シク引取ツタサウデス、適々ノ計画モ
 水泡ニナリマシタ、夫レカラ向フノ者モ、其ノ挙動ヲ
 見テ取ツタト見ヘテ、始メハ戦端ヲ開クノ景氣モ無カ
 ツタガ、余程挙動ガ違ツテ参リマシタサウデス、夫レ
 ハ二十九日マデノ事デゴザリマス、其ノ間ニ可笑ナコ
 トガ多フゴザリマス、サウスルト七月朔日ノ朝ニナリ
 テ、七隻ノ軍艦ガ一里バカリノ櫻島ト云フ所ノ地方ニ
 碇泊場ヲ變ヘマシタ、其ノ時ハ随分天氣ノ模様モ、大
 風ノ兆デハ無イカト云フ天氣デゴザリマシタ、外国人
 モ大風ノ模様ヲ見テ、碇泊ノ位置ヲ變ヘタカト思ヒマ
 シタケレドモ、薩摩ノ方デハ今ノ様ナ馬鹿ナ挙動ガゴ

ザリマスカラ、アチラモ見テ取ツタト見ヘテ、碇泊ノ
 位置ヲ變ヘタデアラウト思ヒマス、朔日ノ朝ニナリマ
 シテ、琉球ノ船ガ三隻ホド碇泊シテ居リマシタ、是レ
 ハ支那風ノ船デー、戦争トナル積リデアルカラ、此ノ
 船々ハ半里バカリノ所ニ逃ケサセマシタ、其時此方ノ
 蒸氣船ハ三隻碇泊シテ居リマシタ、一隻ニハ寺島宗則
 ガ船長デ、一隻ハ五代友厚ガ乘リ頭デ、モウ一隻ハ本
 田彦次郎ト申ス者ガ乘リテ居リマシタ、最早ヤ戦端ヲ
 開ク勢現ハレテ参リマシタ、此方ニハ始メヨリ戦フ積
 リテアツタカラ、寺島・五代ハ甚タ憂ヘマシテ、此レ
 デ戦端ヲ開ク場合デナイト云フコトハ、前以テヨリ申
 シタケレドモ、用ヒラル、コトデナク、ソナ臆病ナ
 コトヲ言フカナド、云ツテ、輕蔑セラレタサウデス、
 其ノ三隻ヲ焼カル、カ、取ラル、カニ相違ナイト感シ
 マシタカラ、此ノ軍艦ヲ近イ所ニ置イテハ宜クナイカ
 ラト、寺島・五代ハ申立テ、夜中ニ外ヅスガ宜イ、然
 ラザレハ彼レノ有ニナルト云フコトヲ、殊更寺島ガ忠
 告致シタサウデス、夫レ文ケハ採用セラレテ、サウシ
 テ城下ヨリ三里バカリノ所ノ、大隅ノ国ノ重富^(船長部)ト云フ
 ガアリマス、ソコノ海マデ寺島杯ハ乗込^ンデ、外ヅシ

タデゴザリマス、少シ港ノ様ナ所デアリマス、サウイ
ウコトデ、英国船ノ方デモ、蒸氣船ハ外ヅシ、琉球船
モ外ヅシ、又日本ノ親船ガ數十隻居ツタケレドモ外ヅ
シ、砲台ニハ警衛ノ兵モ多ク見ヘタカラ、向フデモ余
程其ノ辺ヲ見テ取ツタト見ヘマシテ、櫻島ノ方ニ碇泊
シタト見ヘマス、サウシテ七月二日ノ朝ニナツテ、私
共モ現在見テ居リマスガ、其三隻ノ蒸氣船ヲ英船ガ挽
ヒテ、彼ノ大軍艦ノ碇泊場ノ方ニ向ツテ行キマス、今
デ申スト巳ノ刻比デゴザリマシタ、皆ナ英船ガ我が蒸
氣船ヲ奪ツテ、大軍艦ノ居ル所ニ向ツテ引出シマシテ
ゴザリマス、是レハ奪ハレタト云フコトヲ感シマシタ、
然ルニ天保山ト申ス処ノ砲台ヨリ、直チニ発砲シ始メ
マシタ、始メノ程ハ距離ガ遠イデアリマシタ、横カラ
見テ居リマシタガ、弾丸ハ敵ノ船ニハ達セス、皆ナ途
中ニ落チテ仕舞フ様デゴザリマシタ、ソコデア向フデモ
大ニ狼狽シタト見ヘテ、抜錨シテ運動シタルハ余程間
ガ取レマシタケレドモ、砲台ヨリ届カウト届クマイト、
各所ノ砲台ハ無暗ニポンポンヤツテ居リマス、側カラ
見テ居レハ可笑イデゴザリマシタ、夫レカラ凡ソ一時
間余ニモナリマシテ、奪フタ三隻ノ蒸氣船ニ煙ガ立チ

マシタ、サウスルト七隻ノ軍艦モ程ナク運動ヲ始メマ
シタ、幾回モ運動シテ一砲台ニ向ツテ撃チ込ム様ニナ
リマシタ、其ノ距離ハ近フナリマシテ、双方撃チ合ヒ
マシテ、遂ニ城下市中ニ火ヲ掛ケマシタ、遙カニ見テ
居リマシタガ、忽チ燃ヘ上リマシタ、同日ハ朝カラ東
風強ク、午前十一時比ヨリ雨モ甚シク、大風雨トナリ
マシタ、城下ノ砲台ハ東ニ向ツテ居リマスカラ、丸テ
風ヲ受ケテ居リマス、向フノ船ハサウイフ大風雨ニモ
運動シテ居リマスカラ、砲台ノ方ニ吹キ付ケラル、様
ニ見ヘマシタ、夫レニハ余程困難ナ様子デアリマシタ、
サウスルト西ノ刻時デアリマシタカー、第一ノ砲台
ノ前ハ川口ニナツテ、潮ノ干満ニ依リテ砂洲ガ出キル
所デゴザリマス、夫レニ第二ノ軍艦ガ乗リ掛ケマシタ、
其ノ時ハ船カ傾キテ困難ナ様子ニ見ヘマシタ、砲台ノ
ツイ四五丁ノ処ニ横ハリマシタケレドモ、其ノ砲台ハ
始メヨリ構造ガ宜シウゴザリマセヌトコロカラ、敵丸
ノ為メニ大砲モ稍々用立タヌ様ニ打コワサレマシタ、
大小八門程備ヘテアリマシタガ、皆ナ敵弾ノ為メニ打
コワレマシタ、他ノ砲台カラ撃チマシタケレドモ、何
分距離ガ遠イノデ、格別ノ効能ハ無カツタデゴザリマ

ス、其ノ時向フノ軍艦ノ方デモ、帆柱ノ上カラ小銃ヲ以テ、目前ノ砲台中ヲ余程撃チマシタ、小銃ハ數ノ様ニ撃ツタサウデス、サウスルト程ナク他ノ軍艦ガ来テ、綱ヲ附ケテ漸ク引出シマシタ、横ハツテ居リマシタハ一時間ニ余リマシタ、其ノ小銃ノ彈丸ハ、砲台其他ニ沢山落チテ居リマシタ、其ノ彈丸ハ皆ナ椎ノ実ノ様デ、長玉デアリマシタ、鹿兒島デ小銃ノ玉ノ長イノヲ見タ始メデゴザリマス、大砲モ長玉デゴザリマス、近頃ノ英國ノ歴史ヲ見レバ、アルムストンノ發明デ、(Sir William George Armstrong)此ノ時ノ報告書ガ載ツテアリマス、随分自分勝手ナ報告デゴザリマス、此ノ時砲台ノ兵士ガ一人、敵丸ノ為メニ死ニマシタ、其他所々デ流レ玉デ傷ヲ負フタモノハ、六七人ゴザリマシタケレドモ、現ニ戦死ハ此外ニ二人デゴザリマス、其他商人ナドガ迷テ居ルモノガ、流レ玉ニ方ツテ死ンダモノガ四人アリマス、其他負傷者ハ僅カデゴザリマス、ソコデ戦争中ニ鹿兒島ノ方ヨリ、撃レタ敵艦ニ後日乘リテ見マシタガ、相應ニ傷メテ居リマス、第三ノ軍艦ハ五十ポウンドノ臼砲ヲ以テ、能クモ撃当テタモノデ、一彈デ十余人打チ殺シマシタ、後日彼レガ新聞ニ記シテゴザリマスヲ見マシ

タ、其一彈デ船長ト兵士ヲ殺シテ居リマス、夫レハ彼國ノ歴史ニモ其通りアリマス、其他彼此レ五十九名ノ死傷デゴザリマス、味方ノ方ハ僅ノ死傷デゴザリマシタ、実ニ意外ナモノデゴザリマス、夫レデ五十斤ノ臼砲ノコトハ、後日寺島ノ話ニ同人ノ乗ツテ居ツタ船デアツタサウデス、此朝寺島ガ乗ツテ居ル船ヲ奪ヒニ来タノハ蒸氣船四隻デ、夜明ケ方ニ四隻ノ軍艦ガ来テ、横カラ乘リツケテ直チニ綱ヲ以テ結ヒツケタサウデス、其辺ハ鍛練シタモノデアツタサウデス、乗組ノ者ハソコデ切合ツテ死ンタモノモゴザリマス、是ハ二人死ニマシタ、其他ハ悉ク船ニ乗組ミナガラ船ヲ引出シテ、軍艦ノ方ニ引ヒテ參ツタノデス、其ノ時寺島杯ハ船ノ牢ニ入レタサウデス、夫レカラ本艦ニ送ラレテ、其ノ長官ト一所ニ丁寧ニシテ置イタサウデス、其ノ時砲台ヨリ大砲ノ彈力ノ大小種類ナトヲ問フタサウデス、寺島杯ハ程善ク言ツテ、五十斤ノ臼砲ガ有ルト云フコトヲ言ツタトコロガ、折返シテ聞キ、將校ヲ集メテ運動ノ方法ヲ變ヘタサウデス、後カラ聞クト、五十斤ノ臼砲ガアルト云フニ付テ、砲台ノ距離近ク乘リ込マセタサウデス、砲台ヨリ凡ソ五六町ノ所ヲ運動致シタト見

へテ居リマシタ、夫レハ寺島ノ砲術上ニ就テノ後日ノ話デゴザリマシタ、果シテ夫レガ言ヲ当リト云フモノデモゴザリマセウ、艦長一人ニ士官・水夫ノ輩、其ノ彈丸ノ為メニ二十余人死ンデ居リマス、サウイフコトハ後日ノ話デアリマス、サウシテ其ノ日ハ大風雨デアリマシタカラ、砲台ヲ守ツタ兵士ハ大ハダ抜キニナツテ、終日砲台ノ上ニ現ラハレテ、砲發致シタデゴザリマス、サウシテ申ノ上刻比ニハ向フカラ砲撃ヲ止メテ、昨夜碇泊ノ処ニ引キ取りマシタ、当夜ハ定メテ夜戦ヲ仕掛ルデアラウト、其ノ準備ヲナシタ、私共モ夜討ヲスルデアラウ、引退クハ奇体ナコトデアルト云ツテ、夜中其ノ備ヘヲ致シテ居リマシタ、私ハ其時分天保銭ノ製造方ヲ持チテ居リマシタ、製造所ハ海岸ニ接シタ所デ、上陸ノ備ニ兵士百人モ居リマシタトコロガ、暮時分ヨリ小軍艦ガ一隻、製造所ノ前海ニ乘リ来リテ、頻リニ製造所ヲ攻撃シマシタ、近地ニ大小砲ノ製造所ガゴザリマス、夫レヲモ頻リニ砲撃致シマシタ、其ノ隣リニ旧藩主ノ別荘ガゴザリマシタ、是レモ砲撃シマシタ、焼玉ノ様ナモノヲ打込マレテ、夫レガ為メニ私ノ製造所ト、大砲製造所ハ燃ヘ上リマシタ、私共ハ僅

カノ人数デゴザリマシタカラ、ソコヲ引上ゲテ、彈丸ノ直様来ラヌ所ニ扣ヘテ居リマシタトコロガ、製造所ハ悉ク燃ヘテ仕舞ヒマシタ、旧藩主ノ別荘ハ燃上ラヌデ済ミマシタ、之レガ七月二日ノ戦争ノ始末デゴザリマス、其時城下ノ海岸ニ硫黄商人ガ居リマシテ、硫黄ヲ沢山土蔵ニ詰メ込テ居ルトコロニ彈丸ヲ打込ミマシタカラ、夫レカラ出火ニナツテ、市街及ヒ士族ノ邸宅三百戸位モ焼ケマシタ、此レガ初日ノ戦ノ景況デゴザリマス、先刻モ申シマシタ通り、必ズ夜討ヲスルニ相違ナイト皆人思ヒマシテ、其ノ準備怠ラス、各々上陸シタラ討タウトカ、昔流義ノ槍・薙刀等ヲモ手当致シテ居リマシタガ、上陸ハセズ、軍艦ハ夜モスガラ楽ヲ奏シテ楽シンデ居ルト云フ様ニ聞ヘマシタ、翌三日ノ朝天氣モ晴朗ニナツテ、昨日ノ天氣トハ打テ換リマシタカラ、今日ハ定メテ上陸スルデアラウト、其ノ準備デ居リマシタ処ガ、正午時マデモ一向上陸ノ形ガ見ヘナイケレドモ、蒸氣ノ煙ハ七隻ナガラ立ちテ居リマシタ、程ナク拔錨シタ様子ニ見ヘマシタカラ、程ナク上陸スルダラウトカ、昨日ノ如ク砲撃ヲスルカト思ツタトコロガ、灣口ノ方ニ向ツテ走セ出シマシタ、各所ニ砲

台ガゴザリマスカラ、遠撃致シテ出ル様デゴザリマス、城下ニモ遠方カラ討込ミ、砲台ニモ討込ンダケレドモ、人モ何モ少シモ損セス、其ノ假退イテ初メ碇泊シタ七ツ島マデ参リテ碇泊致シマシタ、サウシテ一夜ソコニ居リマシタ、其ノ船ヲ砲台ノ方カラ討チ傷メタト見ヘテ、夜中修覆スル様ナ音モ聞ヘテ、鍛冶屋或ハ大工ノ立騒グノヲ、望遠鏡デ見掛ケル位ノ距離デゴザリマシタ、又其ノ所ニ一夜碇泊シテ、翌四日ノ朝灣口ニ向ツテ出テ仕舞ヒマシタ、其ノ時ハ侵入ノ時ヨリハ速度ガ緩イ様デゴザリマシタ、十四五里ノ所マデ航シ、中形ノ軍艦一隻ハ残シテ、他ノ六隻ハ出テ仕舞ヒマシタ、是レハ何故ニ一隻残シタカト皆ナ怪ミマシタ、ソコデ陸上ハ警備怠ラス致シテ居リマシタ、後トデ聞キマスルト、機関ガ損シテ航海ガ出来ナカツタカラ、残シタサウデス、七日バカリ経テ引船ガ来テ、引イテ出マシタサウデス、其ノ後英国新聞ヲ見テモ、或ハアルムストンノ報告ヲ見テモ、機械ヲ損シタ為メニ残シテ置イテ、他日引取ツタトゴザリマス、戦ノ次第ハ大略サウイフコトデゴザリマス、又英船ハ錨ヲ棄テ置イテ出帆致シマシタ、先刻オ話し申シマシタ通り、蒸氣船ヲ奪フ

テ引イテ参リマスカラ、砲台ヨリハ無暗ニ砲発ヲ始メマシタ、向フモ狼狼ノ形デゴザリマシタ、錨ヲ上ゲル間ガナカツタト見ヘテ、其錨ハ後日発見致シマシタ、サウイフコトヲ以テ見レハ、無暗ニ砲台ヨリ討立テタカラ狼狼シタト見ヘマス、向フハ直チニ戦フ積リデモナカツタ様ニ思ハレマス、ソコデ錨ヲ上ケル間ガ無クテ、其俣ニ切ツテ運動ヲ初メ、砲発ヲ始メタラウト思ヒマス、錨ハ其後御承知ノ通り、岩下方平等ガ横濱ニ於テ和睦ヲ致シマシタカラ、愆意ヲ結フト云フ積リカラシテ、此方ヨリ長崎マデ送り返シマシタ、其時英人ハ大ニ喜ンタ様子、其後段々聞キマスルト、大切ナ錨ヲ捨テタハ、軍艦ノ一大恥辱ダト云フコトヲ聞イテ、後ト以テ遺憾ナコトデ、此錨ヲ引ツパツテ置ケハ、相應ナ金モ取レルト云フコトデアリマシタ、サウイフコトデゴザリマシタ、軍サノ景況ハ第一ノ砲台ト第二ノ砲台ト云ヘハ、其ノ景況ハ変リマスケレドモ、極概要ノトコロハ夫レ位ナモノデゴザリマシタ、サウスルト四五日モ致シテ、英人ノ死骸ガ漂ヒ上リマシタ、帆木綿ノ様ナ布袋ニ入レタモノモアリ、ケツトノ様ナ物ニ包ンダモアリマシタ、ソコデ此方デハ二人ノ兵士ガ死ン

ダノミデ、手負ガ六七人アツタバカリデゴザリマシタカラ、勝軍ト唱ヘテ大ニ威張リマシタ、英人ノ死骸ハ城下ノ市街廣小路ト申ス所ニ、曝シテ縦覽サセマシテ、サウシテ後チ其死骸ハ、城下外レノ牛掛灘ト申ス処ノ刑場ニ埋メマシタ、其後私ハ長崎ニ出マシテ、戦争ニ參ツタ軍艦ニ隻ニ乗ツテ見マシタ、相応ニ砲丸ノ痕ガゴザリマシタ、其ノ時我カ砲丸ガ是レ程用ニ立ツタカト思ヒマシタ、機械モ相応ニ傷ンデヨリマシタ、長官ノ住居部屋ノ甲板ヲ討チ抜キタモアリ、砲丸大小船中ニ留マツタノヲ、觀物ニ置イテアリマシタ、夫レデ我ガ砲丸モ用ヲ為シタト思ヒマシタ、

蒲生君(義質) 英人ノ死骸ハ幾ツ上リマシタカ、

寺師君(宗徳) 七ツ、艦長ノ死骸モ上リマシタ、袋ニ

入レテ、玉ヲ附ケテ沈メタモノデアリマシタガ、風波

ノ為メニ打上ケマシタ、七ツ島沖ニテ音楽ヲヤツタハ、

水葬ノ式デアツタデアラウト申シマス、

市來君 水葬ノ案トモ思ハズ、一里半バカリノ所デア楽ヲ

奏シタノデ、ヒドイ奴等ダ、軍サスルノニ、夜中ハ音

楽ヲシテ案シンデ居ルト、拳ヲ握ツタコトデアリマシ

タ、

寺師君 当時鹿兒島ノ台場ハ旧式カ交リテ、中ニモ古式

ノ青山流ト云フノハ、手ニ持ツテ居テ撃ツノデ、夫レハ青山ト申ス一派ノ師範家がゴザリマス、此レハ沖ノ小島ト云フ所ガ、櫻島ノ側ニゴザリマスガ、小サイ島デ、其絶頂ニ砲台ガゴザリマス、ソコニ青山ハ一派ノ門弟ヲ率ヒテ守ツテ、英船ガ引ク時ニ、マサカ其所ニ砲台ガアルトハ思ハナカツタカ、其近海ヲ通ルト、頭ノ上カラ不意ニ鉛丸ノ大砲ヲ撃ツタケレドモ、鉛丸デアルカラ、船ノ側ナドニ食イ附イテ、玉ハ這入ラナカツタガ、大變驚イタ様子、若シ七隻デ此ノ小島ヲ囲ンダラ大變ナデアルガ、其事モナク引キマシタ、之レナゾハ全ク自分ノ力ヲモ量ラズ、無暗ニヤツタカラ打テタ事デアリマス、

市來君 此ノ戦争ハ今ニシテ考ヘルト、大損亡ハ無論、

馬鹿ナ戦争ト人ハ見モシマセウ、私モ一寸ハサウ思ヒマスケレドモ、此ノ事ハ大變開明ノ刺激案ダト考ヘマ

ス、夫カラシテ一般ノ思想ガ進ンダデゴザリマス、齊

彬ハ開明ヲ主トシタ人デ、大小砲ハ固ヨリ砲台等モ西

洋風ニ築造シマシタ、ケレドモ死後ニハ頓着モ致サズ、

ノミナラス大久保・中山ナドハ攘夷家ノ親玉デ、西洋

風ハイカヌト云フモノデ、古風ナ荻野流ノ砲術ヲ持チ出シテ、ゲベル銃ハ長イトカ云ツテ短フナシマスルトカ、或ハ槍・薙刀ヲ以テ伐リ込マナクテハイケントカ云ツテ、全ク古風ニ引キ戻シマシタケレトモ、大砲ハ西洋風デナケレバナラヌト云フコトデ、備ヘテアツタノハ齊彬ノ御蔭デゴザリマシタ、若シ全ク古風ノ武器ナラバ、見苦シキ敗ヲ取ルデアリマシタロウト考ヘマス、小銃丸ノ長イモノヲ用ユルハ奇体ト、皆ナ人が唱ヘマシタ、其ノ他各々思想發達ノ途トナリマシタ、之ヲ以テ考ヘマスルニ、全ク馬鹿ナ軍サデ無益ナド、ハ申サレマセヌ、

寺師君 城下近辺、其他各所ニ松ガ植テゴザリマス、其松ヲ大砲玉デ打チ抜イタノガ沢山デゴザリマシタ、是ナンドヲ見テ、人々皆驚ヒタノデ夢ガ醒メマシタ、市來君 ソコデ可笑イ一話ガゴザリマス、奈良原ノ宅ハ私ノ宅ヨリ直径二町位モアル所デアリマス、海上軍艦ノ通航スル辺ヨリハ、二十丁計ノ距離デアリマセウ、英艦ヨリ放ツタ一弾丸ガ、奈良原ガ邸ニ飛ビ来リテ、小座敷ノ軒ヲ打毀ハシマシタ、隣リニ質屋ガゴザリマシタガ、其蔵モ毀ハシマシタ、其時分婦女子ノ口ニ、

生麥デ英人ヲ殺シタ人ダカラ、其祟リデソコニ丸ガ来タノデアラウト云ツタコトガゴザリマシタ、偶然ニ当ルモ可笑ナ話デアリマス、

寺師君 私ハ兎供ノ時デ、ハキトハ覺ヘマセヌガ、軍艦ノ来到セシ際ニ、海岸ヨリ眺メテ黒イ大キナ船ガ居リシハ、微カニ覺ヘテ居マス、又戦ガ初リテ兩ヲ犯シ、母ニ負ハレテ逃ケタル時ノ苦ミハ、忘レラレヌ様デゴザリマス、又夜中ニ戸ヲ明ケ、市街ノ焼ケル火光空ニ映リテ物スゴカリシハ、今モ僅カニ覺ヘテ居マス、

市來君 奈良原ト私ノ宅ハ二町モ距リテ、軍サノ前々晩、私ハ製造所ヨリ帰ツテ、其時母ガ申シマスルニ、軍サニナルカラ逃ケナケレバナラヌ、隣家ナンゾハ皆ナ逃ケタト申シマスカラ、私ハ決シテ外ツスニ及バヌ、ドシナ大砲デモコ、マデ来ル氣遣ハナイト、能ク云ヒ聞セマシタ、然ルニ奈良原ノ所ヘ玉ガ来マシタカラ、母カライイヂメラレテ謝マツタコトガゴザリマシタ、其ノ後英國ノ新聞紙ヲ見レバ、鹿兒島戦争ノ時用ヒタル大砲ハ、アルムストングデゴザリマシタヲ知リマシタ、アルムストングノ実験表ノ報告モゴザリマシタ、其実験表中ニ破裂彈ハ好結果ヲ得タト云フコトガ表ニ出シ

テ、一発モ破裂セヌハナカツタト書イテゴザリマス、夫レハ誤リデゴザリマス、私ガ海軍省ノ者ニ云ツタクトガアル、英国ノ歴史モ当テニナラヌ、大小砲ノ丸ノ發セヌノガ幾ラモアルガ、夫レガ發セヌノハ無イト云フコトヲ書イテアル、其書ヲ久光ニ見セマシタ、久光申サレマスルニハ、城下ニ撃込シテ弾丸大小三ツ持ツテ来テ見セタ、皆ナ破裂セヌノデアツタ、直ニ池ニ填メサセタコトデアルト申サレマシタ、彼等ガ書ニモ事実ヲ誤ツタコトモゴザリマス、

寺師君 未發ノ彈丸ヲ弄ンデ死シタ人ガアリマス、市來君 英艦ヨリ砲台其ノ他ニ向ツテ打出シタ玉數ハ、沢山デゴザリマシタ、後日堀ツテ沢山持ツテ參リマシタ、商売人が取出シタモノヲ鍋屋デ焼ヒテ、破裂シテ死シタモノモアリマス、

寺師君 船ト台場ノ違イハ、今日モアルト云フコトデア
ルガ、船ノ方が死人ハ多イモノダト云フコトデスガ、
鹿兒島前ノ濱ノ戦争デ見レバ、船デハ五十何人ノ死傷、
鹿兒島ノ方デハ兵士デ斃レタ者ハ二人、町家ニハ三四
人、他ハ人民ガ不慮流レ玉ニ中ツタノデゴザリマス、
又祇園洲ト云フ台場ハ、一番激戦シタノデ、能クモ撃

ツタコトハ撃ツタモノデ、皆ナ大砲ヲ撃ツテ居リマス、大砲ノ孔ハ大概割レマシタ、或ハ車架モ打毀ハレテ居リマシタ、夫レ故ニ軍艦ガ淺瀬ニ掛リシトキニハ、用立タ、スシテ、打ツコトハ出来ナカツタト申シマス、
早川君(勇) 亞米利加船ヲ馬關デ撃ツタ時、私モ參ツテ居リマシタ、トコロゴコチラノハ、始終丸ガ船ヲ越シマシタ、アチラノ丸ガ岸ノ方ニ直下ニ来マシタ、砲台ノ下ノ方ニ多ク来マシタ、

市來君 鹿兒島下町ノ海岸ニ齊彬ガ見込ミヲ以テ、高イ堤ヲ築キマシタ、サウシテ市街ハ二階造リヲ禁ジマシタ、家根(屋)ノ海上ヨリ見ヘヌ様ニ、壘ヲ高く築キマシタ、其時ハ殿様ガ見立テニ過ギル、此高堤ヲ築テカラ、海ガ見ヘナイトカ何トカ申シマシタ、此高堤ハ支那學者ニ、万里ノ長城ノ高サヲシラベサセテ、家根ノ見ヘヌ様ニ築カセマシタサウデス、戦争ノ時効能ガアツテ、彈丸カ夫レニ当ツテ、市街ハ焼ケヌノミナラス、彈丸ハ人家ニ多クハ来マセナンダカラ、此時ニ皆感心シタコトデアリマス、廢藩後除ケテ仕舞ヒマシタ、又生麥ニ於テ英人ヲ殺シタ次第カラシテ、戦争ニナル迄ノコトハ、種々百端ノ事実ガゴザリマスケレドモ、是ハ後

日ノ御話シニ致シマシヨウ、

寺師君 船ガ參ツタ時、鹿兒島ノ軍備ノ模様ノ一班ヲ申

シマスガ、誠ニ抱腹絶倒ニ堪ヘヌコトガ多ウゴザリマ

ス、或ル策士ノ言フニハ、アノ船ヲ引ツクリ返ヘス方

略ガアラウ、夫レハドウスルト云フト、大ナル樽ニ水

ヲ入レテ出ス、サウスルト彼レガ夫レヲ取ルデアラウ、

桶ガ浮クカラ上ノ船ガ引ツクリ返ヘルデアラウ、ト云

フ様ナコトモアリマシタ(笑声起ル)

早川君 船ヲ奪フタ時疵ガツク、上陸ヲサセタ時ニ切り

尽クサウ、ト云フ策モアツタデアアリマセンカ、

市來君 大久保杯ハ真ノ攘夷家デ、外人ト云ヘバ唾ヲ吐

ク様デアリマシタ、先刻モ申上ゲマシタガ、果物売ノ

謀ハ、鹿兒島デハ西瓜売ノ謀ト云ツテ居ル、夫レハ大

久保ト中山仲左衛門ガ策デアツタサウデス、人間ト云

フモノハ一日々々進歩スルモノデ、其時ハ夫レ位ナ大

久保サンデアツタノデス、夫レカラ後ハ懲リノシテ、

和陸セネバナラヌト云フコトニナツテ居リマス、其位

直ニ腸ノ交ツタトコロモ、一ノ歴史デゴザリマセウ、

其ノ辺ノ事モアンナ高名ナデアツタカラ、当時ノ所

論挙動モノノ歴史話ニナリマスカラ、夫レモ後日ノ御

話ニ致シマセウ、个様御話申スコトハ極大略デ、其大
道筋ノ事実デゴザリマス、其御心得ヲ願ヒマス、細カ
ナコトハ國事執筆史料ニ記シテアリマス、追テ御覽ニ
入レマス(一同立礼)
(史談会速記録第十一卷所載)

五七八 前ノ濱戦争後藩庁ノ措置ニ関スル事実附

九節

市來四郎談話

吉木竹次郎 速記

明治二十五年十二月十二日午後一時一同着席、市來

四郎君臨席、

市來君(四郎) 先日御話申シタ通り、英艦カ七隻ノ中

ニ、一隻ハ鹿兒島灣口ノ十二三里ノ所ノ、小根占郷ト申

所ノ沖合マテ出デ、七日バカリ碇泊シテ居リマシタガ、

挽船ガ来テ挽ヒテ出テ行キマシタ、此時皆怪ムトコロ

ハ、重ネテ襲来スルデアラウ、夫レガ為メ番船ヲ置イ

タモノデアラウ、或ハアノ蒸氣船ハ歩ケヌ様ニ毀ハサ

レタカラ、迎船ヲ待ツノデアラウト云フコトデアリマ

シタ、後日ニ毀サレテ航海ガ出来ヌデ、七日バカリ碇

泊致シタト云フコトガ分リマシタ、サウシテ夜中ニ出

テ行キマシタ、何時来テ挽イテ出タカモ分ラス、夜明ケテ見レバ船ガ居ナイ、沿岸ノ報知ヲ聞ケバ、昨日蒸氣船ガ通ツタト云フ届ケガ出マシタ、果シテ夫レハ迎ヘニ来タデアツタロウトイフコトデゴザリマシタ、サウシテ我が士氣ハ大ニ振フテ、近日必ズ来ルデアラウ、錨モ打チヤツテ行キ、彼レガ上陸スルカト思ヒシニ、上陸モセス、遠方カラ砲撃シテ立チ去ツタカラ、必ズ来ルデアラウ、今度来ラバ船モ皆ナ取ツテ仕舞ハフト云フコトデ、砲台モ以前ノ促デハ行カヌ、修築セネバナラヌ、砲架ノ繕ヒモセネバナラヌト云ツテ、昼夜皆ナ掛ツテ後トノ準備ニ係リマシタ、砲台ノ修繕ハ士族中皆ナ奪ヒ競フテ出テ、土ヲ運ヒナド致シマシタ、誰も出ヨト言ツタ人ハナケレトモ、皆ナ競フテ修繕ヲ致シマシタ、其時ハ忠義ハ若年デゴザリマシタカラ、其場ニ毎日出張シマシタ、自ラ土ヲ運バヌノミデゴザリマシタ、夫レデ台場ノ修繕モ速ニ出来マシタ、大砲モ何十斤ノ何程カ造ラネバナラヌコトニナリマシテ、昼夜兼業シマシタ、盛ソナコトデゴザリマシタ、ソコデ小松・大久保・中山杯ハ、到底是レハ行カヌト云フ感情ガ出タ処ニ、英人尚ホ手難キ準備シテ来ルデアラ

ウ、コチラハ到底軍艦ヲ打チ沈ムル丈ケノコトハ出来ナイ、ト云フコトニナリマシタサウデス、其時久光(島津)ハ、先代齊彬ノ言ハル、コトハ斯様デアツタ、生麥ノ事ハ小ヲ以テ大ヲ破ツタト云フハ、此事デアル、無謀ノ攘夷ハ出来ヌト云フ建言ヲモ致シタデハナイカ、就イテハ和戦ノ是非ヲ衆ノ意見ニ諮フベシ、朝廷ニハ御心配遊バサル、トコロハ、三百諸侯ノ方向モ定マラヌデハナイカ、夫レニ外国ト戦フハ、幕府モ満足セヌトコロ、京都ニ踏ミ出シタハ皮切りデアル、暴ナ事ヲ為シテハ、朝廷ノ存亡ニナルコトデアル、決シテ戦フナト云フコトデナイ、夫レハ皆ナ人ノ望ミニ任シテ遣ラフ、ト云フコトヲ説キマシタカラ、小松・中山・大久保等申スニ、私共モ実ハ斯様デゴザリマス、開港説ヲ始メテ小松ガ腹ヲ吐イタサウデス、此上ハ恥辱ハ一時御忍ビ下サレ、恥辱デハナイ、内ヲ整ヘテ然ル後チニ外ニ向ハネバナラヌ、國家ノ為ニハ、如何ニ不名ハ受クルトモ苦シカラヌ、内ヲ整ヘテ外ニ皇威ノ輝ク様ニセネバナラヌ、一時ノ事ハ互ニ忍バウデハナイカト云フコトデ、夫レガ尤モト思フナラバ、拙者父子ハ汚名ヲ忍ヘバ、國家ノ為ニ忍バウ、夫レニ付テ

ハ評議セヨト申聞ケタサウデス、其ノ同時ニ長藩ノ舉動ガ甚ダ不満足デアルケレトモ、是レモ忍バネバナラヌ、此ノ時ニ方リテ内デ争フハ、大小輕重ヲ弁ゼヌト云フモノデアル、朝廷ノ御威光ヲ輝スハ誰レガヤルカ、三百諸侯ガ同心一致シテヤラナケレバナランデハナイカ、茲ヲ以テ私憤ハ忍バネバナラヌト申シタサウデス、此ノ間モ御話シ申シマシタガ、長州征討ノ時、(徳川慶喜)西郷ガ尾張總督ニ建言致シタコトハ、余程長イ話デアリマスケレドモ、今日ノ話ト連続スルコトニナリマシガ、後日ノコトニ致シマス、夫レカラ小松・大久保ナドモ方向ヲ転ジマシタ、サウシテ先ツ幕府ニ向ツテ話ヲ附ケルガ宜カラウ、英人ニモ直接ニ談判スルモ宜カラウ、ト云フコトニ内決シテ、岩下(方平)ハ江戸ノ家老デ、情実ト久光ノ密旨ヲ通スル為メ、私ガ行ク積リデゴザリマシタガ、私ハ天保銭等ノ製造ガ至急ノコトデ、内ノ準備ガ第一デアルカラ、他ノ人ヲ遣ルガ宜イト云フコトニナツテ、高崎五六ト重野安禪・奈良原繁ヲ出シマシタ、サウシテ岩下ト打合セテ、幕吏トノ話ガ始マリマシタ、岩下カ話ハ長ウゴザリマスカラ、是レハ岩下ヨリ御話シマセウ、岩下モ攘夷家デゴザリマシタ故

ニ、和睦ト云ツテハ、人氣ニ障ルデアラウト云フトロカラ、幕吏ニモ一ニ遍戦ハウカト言ツタサウデス、夫レハ岩下ガ策謀デ、ソレカラ段々ト話ガ熟シテ、和睦ヲシヤウト云フコトニナツタサウデス、ソコデ三十万弗ノ償金ト、三万弗ノ撫育金モ薩摩ニハ一文モ出サズ、名義バカリデゴザリマシタ、全ク幕府ノ中裁トモ云フベキコトデゴザリマシタサウデス、

岡谷君(繁実) 錨ヲ御辰シニナツタトカ云フコトデ、アレハ勝チ軍サノ証拠ニナルノデアツタトカ云フコトデアリマシタガ、其謝状ハアリマセンカ、

市來君 謝状ハ差向キ公使ヨリ遣シ、後日アチラノ政府ヨリモ參ツテ居リマス、軍サガ散シタ後チ三日位シテ、錨ガアルト云フコトガ分リマシタ、サウシテ戦死シタ英人ノ死骸ハ、続々上ツタ時デゴザリマシタ、其錨ハ此方ノ汽船焼キ沈メラレタ其ノ辺カラ、五六丁ノ所ニ沈ンデ居マシタ、夫レカラ引上ケマシテ、縦覧サセマシテ、勝軍ト云フコトヲ唱ヘマシタ、人氣ハ是非後日戦ハフト云フコトニ奮ヒマシタ、内輪デハ岩下ナドニ和睦ヲヤラセルト云フコトニハナツテ居マシタケレドモ、夫レハマダ發セヌデアリマシタカラ、再戦ノ準備

ハ頻リニ致シテ、再ヒ戦ハウト云フコトハ、國中一般ノ人氣デゴザリマシタ、和睦ハ岩下ガ報告ノ後ニ発表致シマシタ、其ノ時ニハ沸騰モゴザリマセナシタ、實際コレハイケナイト云フコトハ、人々諦メタト見ヘマス、

岡谷君 錨ハドウイフハヅミデ、御戻シニナツタモノデスカ、

市來君 和睦ニナツタ報知ガアリマシタ、修交ノ交リヲ仕ヤウカラ、鹿兒島ニ修交ノ為メニ行ケ、鹿狩リデモスルガ宜イト、岩下ガ專斷デ言ツタサウデス、英人モ喜ンデ、修交ノ為メナラ直グ行カウト云ツタサウデス、其ノ間ニ報知モゴザリマシタ、長崎ニガラハト云フ商(Thomas Blake Glover)人ガアル、藩士野村宗七ト云フモノ長崎ニ出テ居ルカラ、ガラハニ言ツタ様子、修交ノ事ニナツタカラ、彼ノ錨ハ此方ノ用ニ立タヌカラ、欲シイナラバ遣ラウト言ツタトコロガ、大変喜ンデ実ニ我海軍ノ不名譽デ、我国ノ恥辱デアアル、軍艦ガ錨マデ捨テタト言フコトハ、万世ノ恥辱デアアル、夫レヲ修交ノ為メニ返シテ呉レルハ、実ニ喜バシイコトデアアル、夫レヲ返ヘシテヤラウト云フコトナラバ、コチヲヨリハ其ノ償モ出サウト云

ツタサウデス、此方ハ修交ニ付テ、返スニツイテハ金ヲ取ルニ及バヌト云ツタサウデス、其事ハ野村ガ帰ツテ来テ、戦ヒハダメデアアル、修交ノ印ニ返ヘサウデハナイカ、——夫レハ返シテヤラウト云フコトデ、野村ガ持テ行キマシタ、其喜ビ一方ナラズ、英国公使ヨリ篤ク謝礼ガ申シ参リマシタ、夫レカラ半年バカリ経テ、英国ヨリ謝状ガ来マシタ、

市來君 サウシテ岩下ハ横濱ニ於テ、英人ニ鹿兒島ニ行テ、鹿狩リデモスルガ宜イト云フコトヲ申シタラ、英人ハ喜ンデ行クコトニナツテ、処ガ岩下ノ懸念ハ、鹿兒島壯年輩ガ砲発デモシハセヌカ、ト云フコトヲ心配シタサウデス、夫レ故二度飛脚ヲ立テ、英人ガ来ルカラ穩ニト云フコトヲ報知シテ、其ノ返事ノ来ルマデノ間ハ世話ガヤケタト申シマシタ、然ルニ待遇ヲ厚クシテ、鹿狩リモサセタ、或ハ操練ヲ見物シタトカ云フコトデ、安心シタサウデス、夫レカラシテ、英人ハ大變薩摩ヲ可愛ガル様ニナリマシタ、其冬十二月ノ初メ、私ハ廣島ノ様ニ行キマシタ、其使ノ主意ハ、(後野長訓)廣島侯カラ軍見舞ト云フコトデ、御使者ガ五六人來テ、戰場ヲ実見シ、或ハ製造所ノ見物ナド致サレマシテ、其時私

ハ天保銭製造所ヲ受持テ居リマシテ、製造用ノ銅ノ足
 ラヌニ苦ミテ居リマシタカラ、夫レヲ廣島ニ相談致シ
 タトコロガ、世話シテヤラウト云フコトニナツテ、買
 易ノ取組ヲ致シマシタ、夫レハ私ノ職掌デ致シタコト
 デアリマス、元来米穀ノ乏シイ所デゴザリマスカラ、
 夫レヲ買入レ、或ハ天保銭ヲ散布スルノ道ヲ弘メンガ
 為メニ、交易ヲ始メマシタ、其ノ時分廣島ハ財政困難
 ト云フコトデ、正貨借用ノ相談ガゴザリマシタカラ、
 十万両ヲ貸シマシタ、サウシテ十ヶ年ニ返済等ノ相談
 デ、彼是ト天保銭散布ノ計画モ附属シテ謀リマシタ、
 其ノ辺或ハ軍見舞ノ御答札ヲ兼ネ、私ハ藩命ヲ以テ廣
 島ニ参リマシタ、第一ニ貿易ヲ盛ソニスルノ計画デゴ
 ザリマシタ、其ノ時分ハ久光モ京都ニ出テ居ラレマシ
 タカラ、アチラニモ用ガゴザリマシ、或ハ海防ハ益
 々敵ニセネバナラヌカラ、砲台備用ノ大砲ヲ外国ヨリ
 買入等ノ事モ受合ヒマシテ、長崎ニモ立寄リマシタ、
 十二月ノ初メ鹿兒島ヲ立ツテ、長崎ニ行ツテ大小砲ノ
 註文ヲ致シマシタ、其時和蘭ニ仕ヤウトカ、佛朗西ニ
 仕ヤウトカ云フコトデアツタガ、最早ヤ修交モ出来タ
 カラ、英国ニ仕ヤウト私ハ決シマシテ、然シテ彼ノ領

事官ニ頼ンテ、鹿兒島ノ戦争ニ来テ居リマシタ軍艦ニ
 参リ、艦將ノ口入ヲ以テ、大砲八十門ヲ詔ヘマシタ、
 其時鹿兒島ノ大砲モ、用ヲ為シタト云フコトヲ發見致
 シマシタ、軍サノ状況ヲ船長ヨリモ委シク聞キマシタ、
 随分苦シカツタト申シマシタ、形チヲ見テモ、ソココ
 、痛メテアリマシタ、此ノ話ハ長ウゴザリマスカラ略
 シマス、又船中ニ此方ヨリ打ツタ不発ノ玉大小三四個
 アルヲ見マシタ、夫レカラ大砲詔ヘノ事モ談シマシタ、
 其ノ時艦將ハ戯レテ申スニハ、ソソナニ大砲ヲ買フテ、
 再ヒ戦フ積リデアルカト申シマシタカラ、左様デアル、
 国中ノ人氣ハ再戦ヲ望ンデ居ルカラ、貴国ニ頼ミテ利
 器ヲ得タイ、サウシテモ一遍ヤツテ見タイト積リ
 デアルト答ヘマシタ、斯ク打解ケテ話モ致シテ、商人
 ガラハガ中ニ這入ツテ、二十四斤以上ノ大砲八十門、
 ミニヘール銃五千挺註文致シマシタ、夫レカラ其ノ年
 ノ十二月ノ末ニ佐賀ニ参リテ、兩三日滞在シテ、彼ノ
 藩ノ製造所ナト見物致シマシタ、其時大隈サンニ逢ヒ
 マシテ、英船ト鹿兒島トノ戦争ノ実況ヲ聞キタイト云
 フコトデ、小出ト云フ洋学者ト大隈其他ノ人々ニ軍サ
(光彰、佐賀藩士)
 ノ話ヲイタシマシタ、師走ノ二十八日ニ太宰府ニ参リ

マシタ処ガ、下ノ關デ、本藩ノ汽船ヲ打毀ハサレタ巷
説ヲ聞キマシタカラ、直クニ福岡マデ參リマシテ、吉
永源八郎ト云フ人ガ鹿兒島ニモ來タ人デ、知人デゴザ
リマスカラ、吉永ノ宅ヲ訪フテ事實ヲ聞キマシタ、夫
レカラ晝夜兼行シテ小倉ニ出マシタトコロガ、予ネテ
出張ノ役人土持佐平太ト申スモノガ、沈没ノ始末杯ヲ
搜索致シマシタガ、風説ノミヲ搜索致シテ居リマシタ
カラ、右役人ヲ引立テ、行キマシタ、小倉重役ハ私ガ
下ノ關ニ渡リ、長州役人ト談判セントスルコトヲ聞テ、
行クコトヲ止メマシタケレドモ、私ハ謝シテ、無暗ニ
擊砲セラレタハ、曲彼ニ在リト認メマスノミナラズ、
私ハ其ノ始末質問ノ為メデアルカラ、殺セバ尚ホ曲彼
レニアリ、若シ又私マデモ殺シタラバ、朝幕ノ処分モ
アラウト云ツテ行キマシタ、サウシテ下ノ關ニ行キマ
シテ、彼ノ役人ニ面接シテ、砲撃ノ始末ヲ委シク聞キ
マシタ、是レハ後日ノ話ニ致シマセウ、長州役人ハ初
メヨリ濟マヌコトデアルカラ、御託ビヲト云フコトデ
ゴザリマシタ、私ハ御託ビヲ御取次申ス訳ニハ參リマ
セヌ、筋ガ違ヒマスト云ツテ、サウシテ京都ノ様出マ
シタ、大坂ニ着ヒタ処ニ、京都在勤ノ兵士等、問罪ノ

為メ出軍セント頻リニ起リマシタサウデス、ソコデ奈
良原ト山口金之進・伊藤萬次郎此ノ三人ハ、長州へ談
判ノ為メニ下ルトテ、大坂デ逢ヒマシタ、三人ハ私ガ
談判ノ趣ヲ聞イテ、事足レリトテ引返シマシタ、京都
屋敷デハ、兵隊ノ激昂甚フゴザリマシテ、私ハ小松・
大久保ナドニ談判ノ始末ヲ告ケ、然シテ久光ニモ申出
デマシタ、其後板倉老中ヨリモ御呼出ガゴザリマシテ、
談判ノ次第ヲ申立テマシタ、程ナク十余藩ニ長州征討
出兵ノコトヲ御達シニナリマシタ、其談判ノ趣ハ長フ
ゴザリマスカラ、後日ノ御話ニ致シマセウ、今日ハ此
マデニ致シマス（一同立礼）

（史談會速記録第十一卷所載）

鹿児島県史料編さん関係者

顧問 聖心講師 大久保利謙

早稲田大学教授 竹内理三

学習院大学学長 兒玉幸多

東洋大学教授 沼田次郎

前東京大学教授 小西四郎

委員 鹿児島女子短期大学教授 北川鐵三

鹿児島大学教授 桃園恵真

教授 原口虎雄

教授 四本健光

教授 五味克夫

教授 桑波田興

鹿児島県立青少年
研修センター所長 村野守次

宮之城町教育長 山下千本

玉龍高等学校校長 芳即正

所長 益山重二

総務課

岡本政徳

田中昇

中野實

西迫清成

今別府修一

郷原美保子

蔵敷清子

田島秀隆

田實勇

下堂園純治

野村秀三

木山常一

堂満幸子

伊東洋子

鎌田二十代

編集課

(昭和四十八年十月退職)

鹿兒島県史料

忠義公史料 第一卷

昭和四十八年十二月一日印刷
昭和四十九年一月五日発行

非売品

編集 鹿兒島県維新史料編さん所

発行 鹿 兒 島 県

印刷 凸版印刷株式会社